

# 伝承に見る平得村の村落移動

## 目 次

- 1 はじめに
- 2 村落移動の伝承
- 3 ナカンドウ村に関連する伝承
  - (1) パイスフツオンについて
  - (2) ニスヌフツオンについて
  - (3) フナイルについて
  - (4) 嵩田トメースクについて
  - (5) 宇部オンについて
  - (6) 新本井戸について
  - (7) ナカンドウ村跡の消えた井戸
- 4 史的考証のころみ
  - (1) 平得村の発祥地について  
— パイノラ説への疑問 —
  - (2) ヘーギナー村落時代
  - (3) 新城原村落時代
  - (4) カジャフチ村落時代
  - (5) ナカンドウ村落時代
- 5 今後の課題 ——— むすびにかえて

## 1 はじめに

平得村の村落移動については、喜舎場永珣、宮良安彦両氏によって、すぐれた研究が発表されている。

ここに発表するのも、両氏の説を参考にしつつ現存する平得村の古老を尋ね調査したものである。しかし学年末の忙しさと砂糖キビ収穫の農繁期とかかちあい、それに流感がはやり、調査対象にしていた古老達から十分な調査ができなかったこと等、不利な条件が重なったことは残念である。

また、調査期間のため、伝承のみの調査に終り、祭りや古謡、平得村の村落構成等の調査ができず、一面的なものに終ってしまった。したがってこの研究は中間発表でも初歩的なものである。今後の総合的な研究によって、平得村の村落移動の歴史とナカントウ村遺跡の歴史的な意義が解明されることを期待する。

## 2. 村落移動の伝承

昔のことである。この島に大地震があった。地震がやむと日夜七日間、天から火雨が降って来た。この火雨のため島の生きとし生ける物ことごとく死んでしまった。

ところが、この火雨の災をのがれて生き残った2人の兄妹がいた。この兄妹は火雨が降って来たので、一目散に逃げてヘーギナー川沿にある岩陰に入った。丁度その時である。南北にあった巨岩が二人を覆うようにして倒れて来た。二人はもうだめだと思った。ところが、不思議なことに火雨が降り止むとその巨岩は両側に開き、青い空を見せてくれた。二人ははじめて火雨の災から助かったことを知り喜んだ。この兄妹が気がつくと、二人を火雨の災から助けた巨岩の間には水溜ができていた。それは深い淵のある青い空を写すきれいな池であった。この池が平池と呼ばれている。

兄妹は、この平池の水を飲んで生活していた。島に生き残ったのは二人だけであった。二人は兄妹の仲であるので、夫婦になれず困っていた。二人はどうにかして子孫が授かるように神に祈願していた。すると白髯白髪 of 老人が二人の前に現われ、二人を井戸の口に連れて行き、それぞれ反対の方向へその周囲を廻り、互いに手を握り合うよう命令した。二人は老人の命ずるまま井戸の口を廻り廻り合う地点で交互に手を握り合った。老人は「これによってあなたがたは子宝に恵まれる、それをもとにして子孫繁昌しなさい」といい残して消えた。

このようなことがあって、しばらくすると不思議なことに妹が懐妊した。老人に言われた通り、これからの子孫が繁栄し、このヘーギナーの平野で村落を形成していったとのことである。<sup>(1)</sup>

ところがここはヘーギナー川の近くで、マラリヤ病がひどかったので、シーナ川と越えて更に南の台地、新城原に移転し、新城村となった。新城村跡には、村人たちが使用した新城原井戸という降り井戸がある。

この新城村も更に南の上原のウイヌスウズあたりに移転したカジャフチ村と改名した。ここにも、村人たちの使用したウイヌスウズ井戸という降り井戸があったが、今はほとんど埋められている。この頃、鍛冶屋もあったと伝えられる。

このカジャフチ村も、更に東南の低地で農耕に適するナカタ原に移動し、ナカンドウ村と改名した。この村には降り井戸(?)があった。<sup>(2)</sup>その頃ナカンドウ村には、ウーリ家の先祖の七人兄弟がいた。彼等は武勇にすぐれ、強力者で村の東西南北の入口に家敷を定めて村を守っていた。だからナカンドウ村は、外敵からの侵略に一度も会うことがなかった。

ところがこのナカンドウ村も村番所まで建築してあったが、人頭税の収納や蔵元からの交通が不便であったので、七人兄弟のリードによって、現在の平得村へ移転した。オーリ家をいうのは、村移転のとき、七人兄弟が村人にここに村を寄せておいで(オーリ)と呼びかけたのに由来する家号だといわれる。

七人兄弟は、村移転して、長男の舟屋儀舎真の屋敷内で掘り抜き井戸を造るのに成功した。これが平得村ではじめて出来た掘り抜き井戸でアラムティミ井戸と呼ばれた。

この時出来た平得村は、大阿母オンの北側から宇部オンの前のウーリ家あたりまでの村であった。この村は村の発祥地、平池の「平」にちなんで平村と命名されたといわれる。しかし、後世に首里王府の命令で二字の平得村と改名されたと伝えられる。<sup>(3)</sup>

### 3 ナカンドウ村に関連する伝承

#### (1) パイヌフツオンについて

周囲約60メートル四方の境内を持つオンである。沖縄開発庁八重山総合農業開発調査事務所<sup>(1)</sup>の東北の地点約300メートルの所に位置する。このオンはナカンドウ村の南入口にあたる所で、七人兄弟の中の一人の屋敷跡だろうと言われる。このオンは別名 シクナマウガンともいわれる。これは原名による名称である。現在はパイヌフツ、ニヌフツオンともいう。それは、ニスヌフツオンが飛行場造りのため戦前消えたので、それをパイヌフツオンにまとめたためにこう呼ばれているとのことだ。

香炉は一つであるが、祭りの時は一つの香炉に必ず二組の線香を立てる。

祭られる神はオーリ家の七人兄弟の中の一人である。その方は行く方がわからずに死んでしまったといわれる。だから境内には積石の墓もない。祭りの時の供え物（レーサン）もフナイル<sup>(4)</sup>や、嵩田トメースクに供えるレーサンより二つ少ない。

#### (2) ニスヌフツオン

現在なくなっている。第二次大戦中、その跡は飛行場を造る時消えた。パイヌフツオン北方約400メートル地点の排水溝近くにあった。だから、現在、パイヌフツオンと一緒にしてこの神は祀ってある。オーリ家の七人兄弟の中の一人だといわれる。ナカント村の北口にこのオンは当たるとのことだ。<sup>(5)</sup>

#### (3) フナイル

八重山総合開発農業調査事務所より北西40メートル位に位置する。周囲約36メートル四方の広さの境内をもつムルである。境内の中央に半円形の石積墓がある。その前に香炉が台石の上に置かれている。墓の大きさは直径3メートル位、奥行き2メートル、高さ約90センチメートルである。舟屋儀佐真の骨を納めた骨瓶が入っているという。この舟屋儀佐真は七人兄弟の中の長男だったといわれ、王皿とも呼ばれていた。

舟屋儀佐真の呼称については二つの違った伝承がある。一つの伝承は、人頭税の頃、貢物を船屋に集結し、それを盗難から守って船に積むまでの責任者であったから儀佐真の名称に舟屋がつけられた。<sup>(6)</sup> もう一つの伝承は、アラムティミ井戸を掘るとき、フナウラを造り、多良間嶺<sup>(7)</sup>の下の水元の神水を、そのフナウラに入れて、夜の中に人目につかないように密に牛に引かして来て、井戸堀りの竣工祈願水とした。それにちなんで、儀佐真を舟屋儀佐真と呼んだ。<sup>(7)</sup>

#### (4) 嵩田トメースク（ハカ）について

フナイルの少し北よりの西方100メートル位の地点に位置する。周囲約36メートル位の境内である。境内のほぼ中央に三段の石積墓がある。墓石の南側の台石の上に香炉が置かれている。墓の大きさは、2メートル正方形で高さは90センチメートルである。中には骨の入った骨瓶があるといわれる。中央部は海のカサ石でふたしてあるというが、それは確認されなかった。このことは、戦時中、フナイルの墓もこの墓も開け、その骨瓶を宇部オンの境内に移したので確かだということである。

墓の東側に接して力石が置かれている。この石は直径50センチメートルくらいのやや直方体の緑色岩で、その上に同石質の岩片4個が置かれている。

嵩田トメーの名前については次のように伝承されている。タケダは原名である。トメーとは探すとか求める意味である。すなわち、タケダトメーとは、嵩田に田圃を初めて拓き求めた人の意味で、それから名づけられたという。

タケダトメーは、怪力の持ち主であったと伝えられる。それについては、嵩田で田圃を拓いた時のことや、前記の力石をキーパイ（木の鍬）の柄に田圃から担いで来たこと、また農民の知恵とその怪力で宮古の豊見親と我慢くらべをして勝ったこと、更には沖縄の武士が角力を挑んで怯んだ話し等が伝承されている。

(8)

#### (5) 宇部オンについて

このオンは、フナイモルと総合開発農業調査事務所を背にして、産業道路に面したところに位置する。境内の大きさは周囲約200メートル四方である。鳥居もあり、中庭にはウガン所が立ち、その後方にはイビがある。八重山の御嶽一般に見られる形式のオンである。このオンの成立については次のように伝承されている。

昔、ウーリ家の娘が西宇部家に嫁入りした。その頃、新川の唐家の娘が大浜<sup>とう</sup>に嫁入りし、現在の大浜村の北西後方にあるミズオンあたりで自然石の珍しいものを拾って来て、信仰していた。すると子孫は繁昌するし、作る作物もよく稔り、その信仰の恵みを受けていた。それで宇部家に嫁入りしたブナリも、その石を分けてもらい、イビに安置してそれを信仰するようになった。これが宇部オンの初まりであると伝えられる。宇部家の嫁が信仰したので宇部オンと名づけ、その嫁はオーリ家の娘で最初の司であったのでオーリブナリと呼ばれた。

(9)

宮良安彦氏の研究の中には、この宇部オンは七人兄弟の屋敷跡で、彼等の引矢の稽古場であったとの記録が見えるが、筆者の調査では伝承の中にそれを聞くことができなかった。

(10)

#### (6) 新本井戸について

この井戸は、宇部オンの西方30メートル位の所に位置する。昭和25年建立の井戸頒徳碑が立っている。その碑文の起草者は喜舎場永珣氏である。

この新本井戸については、次のように古老たちは伝承している。この井戸は第一家の先祖七人兄弟によって、長男舟屋儀佐真の屋敷内に掘られた。平得村で初めて造られた掘り抜き井戸である。普通はツンナーカーと呼ばれる。ツンとは釣瓶のことで、昔はクバの葉を丸くして作っていた。ナーとは縄のことである。つまり、ツンナーカーとは釣瓶に縄をつけて水を汲む井戸の意である。これに対してウーリンカーというのがある。これは、下りて行って水を汲む井戸の意味である。この井戸の正式の名称はアラムティミカーである。それに新本井戸の字を当てるのは適当でない。新本の字を当てたのは喜舎場先生で、これはいつか訂正しなければならない。アラムティミカーというのは、新しく求め得たツンナー井戸の意であるから、字を当てるとすれば新求め井戸でなければならない。このアラムティミ井戸は、雨乞いの謡（新本ヌフチィ）の中でもうたわれている。この謡の中に「多良間カイ、夜フキシヨウリ、水納カイ、ユチィリシヨウリ」と謡う所がある。これは多良間、水納に行ったということではない。アラムティミ井戸を掘る着工の時、舟屋儀佐真がフナウラ（深田あたりで使用される舟型のソリのようなもの）をつくり、夜中、密かに人目をさけて、それを牛に引かせて行って、マイシ岳の多良間嶺の下の水元の水を汲んでそれに入れて来て、井戸の竣工祈願の祝い水とした。このこと

を、あの謡の中では謡っている。あのフナウラのことを夜フキフニという。また、このように持って来る水のことをウモル水という。

昔から多良間嶺の下の水は、どんな旱魃にも渴くことがなかったので、長い旱魃が続くと先祖たちはその水を汲んで来て飲み水に使っていたといわれる。それで、現在でもその水元の神ヘカーラヨーズ（祝）という祭りを九月頃やってやっている。<sup>(11)</sup>

#### (7) ナカンドゥ村跡の消えた井戸について

パイヌフツオンの北方150メートル位のところにあったといわれる井戸である。戦前は砂糖キビを積み、運搬するトロツコの線路がすぐその井戸の側を通っていたという。ところが戦事中、飛行場のため埋められてしまった。この井戸については降り井戸、堀り抜き井戸の二説がある。

一つの伝承者の説はこうである。戦前のことで、昭和何年頃のことであるかわからないが、あの井戸に慶田盛家の牛が落ちて、村中大騒動をしたことがわかった。その時、その井戸をのぞいて見たら、確かに降り井戸であった。<sup>(12)</sup>

あと一つの伝承者の説は次のとおりである。その井戸は井戸口の小さな堀り抜き井戸であった。古い井戸は口が広いが、この井戸はそう古い井戸とも思われなかった。自分たちの子どもの頃（伝承者は現在65才）、あの近辺に本土の方で川勝という姓名の一家が住んでいて、あの井戸を使用していた。だから自分の見た井戸は堀り抜き井戸であった。牛の落ちるような井戸ではなかった。もとは降り井戸であったのを川勝が堀り抜き井戸形式に造りなおしたのか、あるいは別に降り井戸があったのか、そのへんの事情はよくわからない。川勝一家はその後ヘーギナーに引っ越して行って、あちらで住んでいた。<sup>(13)</sup>

### 4 史的考証のこころみ

以上の村落移動の伝承とナカンドウ村に関する伝承は、平得の古老数人の伝承を喜舎場永珣、宮良安彦の研究を参考にしつつまとめたものである。伝承者の中には、この両氏の研究の影響を受けていると思われるのもあったし、更に両氏の研究への反論の形で、伝承を語る方もいたことを付け加えておく。<sup>(14)</sup>

この伝承の史的考証をする上には、まだいろいろな問題点がある。しかし、文字による記録的な資料の存在が認められない今日、こういう形での伝承と考古学的な発掘調査による結果を待つ以外、その史実の解明は今の所不可能のようである。

ところで、本稿では以上の伝承について、いろいろな問題点を予測しつつも、史的な考証といったら大げさだが、それをこころみたいと考える。伝承についての調査研究の足りなさを感じつつも、これが今後の考古学的な研究の成果とどう結びついていくか、筆者の関心大なるものがある。ひそかに期待したいところである。

#### (1) 平得村の発祥地について

————— パイノ ーラ説への疑問 —————

喜舎場永珣、宮良安彦の研究によると、平得村の発祥地は金武岳の東南のパイノ ーラであるといわれる。しかし筆者の伝承調査では、パイノ ーラ説は出てこなかった。また、表面的な踏<sup>(15)</sup>

査であるが、パイノーラにはそれらしい遺跡は認められなかった。パイノーラの南方約2500メートル地点の大野部落のコンピラ坂附近からは、石斧を表面採集で得たことは聞いている。またそれより南方の伊野田小学校の北側の川原沿や南西の洞窟や畑中から曲玉、石斧が出土していることは確認されているが、パイノーラからこのような遺物が拾われたということは聞いていない。

平得村とパイノーラの関係については、古老たちは、月夜浜ユンタとの関連で伝承している。ハンナ大主はヘーギナ田を開墾した。ところが田圃が川の水面より約6尺ほど高くな<sup>(16)</sup>って、水が引けなくなって困っていた。そこで、新本家の先祖はチビ田から溝を造り、川の上はビー(木を削いて造る桶)をつくって通して水を引くことに成功した。これによって新本家の先祖はハンナ大主に認められ、パイノーラ近辺の金武牧場の管理責任を牧場の権利の一部まで与えられた。それで牧場内に管理小屋をつくり、時々泊って管理するかたわら、その土地を借り受け綿花の栽培もしていた。その頃、月夜浜ユンタは生れたと伝えられる。それ以外にパイノーラと平得村の関係はなく、村の発祥地がパイノーラであったということは、聞いたことがないというのが古老たちの言葉である。

この伝承によると、新本家の先祖が<sup>(17)</sup>パイノーラとかかわりあいを持っていたというのはハンナ大主の時代である。ハンナ大主は、その墓碑によると童名は保久理で石垣宗延のことであり、康熙38年(1699年)71才で死去されている。35才で頭役になり、14年間くらい務めているのが見える。<sup>(18)</sup>新本家の先祖がパイノーラで牧場管理をまかされたのはほぼこの頃だと考えられる。これと平得村の発祥とは時代的にも結びつきそうでない。やはり、平得村の発祥地——パイノーラ説には疑問が残る。

## (2) ヘーギナ村落時代

古老たちは、平得村の発祥地を執拗なほど平池だと主張する。平池の伝承はそう多くの方々に知られていないようだが、発祥地としてはその伝承を知らない古老でも、やはり平池と伝え聞いているという。平池のこの伝承は、古事記や他の多くの島々の創世紀的な伝承と共通したものを持っている。確かにこの平池は平得村の発祥地ではなくても、その村の形成起源に重要な関連を持っていたであろうと考える。

平池の位置は、宮良川の河口より約200メートル位西方にあり、ヘーギナ川沿いであって、その水位の変化によって出来たと思われる不定形の池である。池はその伝承にある通り南北の巨岩の間にある。この池の位置する南面側は断崖になっていて西方へ延び、その上からヘーギナーの平地が続く。この断崖には自然洞窟があり、古老たちは伝承の中の二人の兄妹はここを住み家としていたのであるという。

戦後まもない頃、この断崖沿いを採掘した嵩原玄吉という土木業者がいて、その際多くの石斧や遺物の出土があったと伝えているが、筆者はまだ確認していない。この平地の溜り水やヘーギナー川の地表水を使用しながらこの近辺に石斧を用いる人々の村落があったのはまちがいないようだ。また、このヘーギナーの位置が大浜の北方海岸から約2,000メートル位も離れた所に所在すること等を考えると、漁撈という自然採集時代を脱しつつ農耕生活へと移行していった頃の村落ではなかったかと考えられる。

### (3) 新城原村落時代

ヘーギナーの平地は、八重山農業試験場や熱帯農業研究所等があって、現在では石垣島の農耕地の中でも一等級である。於茂登やバンナー岳のふもとに水源をもって小川をなすところが多く、近くには水田もある。しかし、マリアのあった頃このあたりは湿地草原をなすところもあったであろうし、現在とはだいぶ違う土地柄ではなかったかと考えられる。それでヘーギナー村は伝承にあるように、スイナー川を越えてさらに南の台地、新城原へ村落移動を余儀無くされたのではないか。これと共にまた、農耕生産活動がすすむにつれ、外敵の侵略に対応する原始的な防禦上の手段が台地への移動の原因となったのではないかと考えられる。しかしこれはあくまでも推測である。それに新城原へ移転する頃はすでに降り井戸をつくる技術と知識ができていたのである。これも台地への移動を可能ならしめた要因であっただろうと思われる。新城原井戸の遺跡としての存在はこのことを暗示しているように思われる。

この新城村は東に隣接するブンネーマあたりまで広がる村であったようだ。戦前まではこの新城原やブンネーマには家敷跡らしき囲いが見られたとのことである。ブンネーマには、ブスマヤーカツ（武士の家垣）と呼ばれる広い石垣囲いの家敷跡もあったと伝えている。<sup>(19)</sup>

このようなことからすると、新城原村落時代は農耕生産活動もすすみ、外敵の侵略を意識して防禦対策を立て、村落の指導者ブスと呼ばれる英雄も存在し、降り井戸をつくる方法を身につけた頃だということが推測可能になってくる。

### (4) カジャフチ村落時代

上原は新城原に隣接する所である。南方のウイスウズ、マフタまでも1,000メートルとはへだたっていない。すなわち新城原に続く台地である。ここにカジャフチ村があったという。この村落は新城原村落と時代的にもそう大きなへだたりはないように考えられる。伝承上もこの両村落は混線したりして、そう大きな違いを感じさせない。水の生活もウイスウズ井戸という降り井戸である。

しかし、この村の伝承の中に鍛冶の初まりが見らたことは、史的考証の上に大きな意味を与える。鍛冶のはじまりは、鉄製農具の初まりであると考えられる。これが農耕生産活動に大きな革命的变化をもたらしたことで、村落社会にも大きな変動をおこしめたことは想像に難くない。またこのことがカジャフチ村落をより農耕に適した東南の低地ナカタ原へ移動せしめた大きな原因だと考えられる。

カジャフチ村落時代は、以上のことをまとめてみると、水の生活では降り井戸時代であったが、農耕生産活動では鉄製農具が使用されはじめ、それをいち早く手に入れた者が村落の英雄となりつつある時代で、社会的にもより農耕に適する土地柄を求める段階の時代であったと思われる。

## (5) ナカンドウ村落時代

ナカンドウ村はパイヌフツオンを南東の境に、ニスヌフツオンを北東の境に、また西南の境は舟屋儀佐真の屋敷跡、アラムトゥミ井戸の近辺であったようだから、ずいぶん大きな集落を形成していたと思われる。農耕生活が中心であったろうし、カジヤフチ村落時代から鍛冶もあったというから、鉄製農器も本格的に用いられていたであろう。それに集団の指導的な存在七兄弟なる英雄の出現も伝承されていることから、これまでの原始的な貧富の差のそれほどない小集落的な時代を脱していたとも考えられる。しかし、この七兄弟については七龍宮の伸への信仰からきたという思想と関連があるようで、七人が実在の人間であったかどうかは定かではない。また、すぐれたリーダー者的な英雄のいる共同体には七人兄弟という形容でその英雄が伝承される例は他にも見られる。ともかくこのナカンドウ村にも七人兄弟といわれる血族体の英雄が存在したのは史実のようだ。

カジヤフチ村からいつ頃ナカンドウ村へ移転したのか、またナカンドウ村落時代はいつ頃なのか、今は歴史的な資料によることは不可能のようである。しかし、鉄製農具が用いられていたことや、またナカンドウ村時代のある時期までは降り井戸を使用していたであろうが、英雄の一人儀佐真が初めて堀り抜き井戸を造ったことなどは時代考証につながりそうである。また、儀佐真が人頭税の貢納物の船積みまでの責任者であったという伝承や嵩田トゥメーの田園開墾の伝承（鉄製の鋤で開墾したのではないか）、さらにこのトゥメーの怪力の伝承の中に宮古の豊見親が現われること等、その辺からなにか時代的な考証につながっていくような手掛りが得られそうに思われる。<sup>(20)</sup>

ここで水の生活に焦点を当ててみると、ナカンドウ村落時代を仮に前期後期に分けた場合、多分に前期は降り井戸であったろうと考えられる。ナカンドウ村中には降り井戸が存在しなかったと仮定しても、七人兄弟と関連を持つといわれる降り井戸がパイヌフツオンの南方約、600メートル位の所にパイナカーと呼ばれて存在する。この降り井戸は石垣市教育委員会によって文化財に指定されている。現在この降り井戸の祭りはウーリ家によって行なわれている。<sup>(21)</sup>

このパイナカーの名称はおそらく村の南にある井戸という意味で命名されたものであろう。そしてナカンドウ村の前期の人々はこの降り井戸の水を使用していたであろうと考えられる。

ナカンドウ村の後期は、その伝承からしても堀り抜き井戸の技術が入った頃ではなかったかと思われる。そこで八重山ではいつ頃から堀り抜き井戸が造られるようになったかということが問題になってくる。

球陽の記録によれば、尚貞26年（1964年）に渡久地親雲上政包が八重山に来て、その蔵館寺院を瓦葺きに改蓋するとともに、「郡邑ニ穿井アルコトナシ、皆溪水ヲ用井人多ク疾病ス」ため初めて穿井の方法を教えたというのが見える。これによって初めて掘られた井戸が4カ字では、石垣の中のハカのジラバカのソウソウマカー<sup>(22)</sup>だろうと言われる。このソウソウマカーを掘るときその井戸の竣工祈願の時にジラバが謡われ、それがソウソウマカージラバとして今日まで謡い継がれている。<sup>(23)</sup>

舟屋儀佐真の屋敷内に掘られたアラムトゥミカーもこの頃掘られたであろうと思われる。そ



の名称や伝承からしてもこの井戸が平得で初めて掘られた井戸であることはまちがいないよう  
だ。この井戸を掘ることと関連して謡われた「新本フチ」という古謡がある。この古謡の形  
態がソウソウマーカージラバと類似するものを持っていること等を見ても、このアラムトウミ  
カーがこの頃掘られたであろうと考えられる。

このアラムトウミカーと呼ばれる掘り抜き井戸の出現がナカンドウ村の村落移動に大きく原  
因したのではないだろうか。降り井戸から掘り抜き井戸への発展は現在の水道の出現以上に進  
歩的な出来事ではなかったかと考えられる。地下深く何十段もの石段を大事な得がたい水甕を  
頭にのせて、上り下りしなければならなかった水の生活からの解放は想像にあまりあるものが  
あったろう。掘り抜き井戸の出現が村落移動の大きな要因となったということもあり得ること  
である。もちろんこの頃の村落移動には社会的なあるいは村落の行政上の要因もあったであろ  
うが、このアラムトウミカーを造ることに成功したことがオーリ家の先祖たちをしてナカンド  
ウ村の移転を呼びかけさせることとなったのではないかと考えられる。

こうして移転した村は平村と命名された。この平村の命名もアラムトウミカーと呼ばれる掘  
り抜き井戸が出来て、水の生活がナカンドウ村時代とちがい便利になったので、その村の発祥  
地、平池が水の得やすい所であったため、それにちなんで命名された村名だとも考えられない  
ことはない。

ところがこの平村の近隣にはかなり古い時代から小集落的な村があったであろうことは、大  
阿母オンの存在や安居大主、ナランザト等の伝承からも考えられる。それに南方には真栄里村  
の旧村といわれる小集落もあったであろう。これ等の小集落が平村に統合されて大平村(ウフ  
ピサイ村)となって発展していったのではなからうか。これが後には首里王府の命により二字  
姓の平得村となり、また、真栄里も分村しただろうと考えられる。

しかし以上のことは、井戸に焦点をあてての考察であって今後、他の面から総合的に研究さ  
れ、平得村の歴史がますます明らかにされるであろうことを期待する。

## 5 今後の課題 — むすびにかえて —

これまで述べてきたものは伝承をもとにしてその村落移動を見ながら、井戸に焦点をあてて史  
的考証といったら大げさだが、それを試みてみた。しかしそこには多くの問題点が残されたまま  
である。

まず、この伝承にあるような村落移動が史実としてあったのかという初歩的な疑問も起きてく  
る。各村落の年代的なことが明らかにされない以上、この疑問は残る。あるいは伝承される各村  
落は同時代かあるいはそうへだたりのない時代の違った共同体で、それがマラリアという自然的  
な要因とある社会的な事情で平村へ集結統合されていったという考えも推測可能なことである。  
やはりこの点、大きな課題であり、今後、これらの村落跡の考古学による実証的な研究が待たれ  
る。また、ナカンドウ村と平村の成立についても多くの問題点を残している。

ターダブナリと平村とはどのように時代的につながるのか、トニモト家と言われる所と平村の成  
立とはどうかかわり合うのか等も今後、研究解明されなければならない大きな課題である。

おわりに、本稿をまとめるのにあたって、お忙しい中を御協力下さいました平得村の方々に感

謝申し上げるとともに、故喜舎場永珣氏・宮良安彦氏の学恩に深謝する。

注(1) 伝承者 蔵下真知・鳩間正一

(2) 堀り抜き井戸であったとの伝承もある。

(3) 伝承者 注(1)の外に波照間督治、鳩間満喜、西本貞治、西本マアツ、宇里真成、宇里カマド。

(4) 伝承者 西本貞治、宇里真成

(5) 伝承者 蔵下真知、宇里真成

(6) 伝承者 宇里真成

(7) 伝承者 鳩間満喜

(8) 注(3)に同じ。

(9) 伝承者 宇里真成

(10) 宮良安彦「平得・真栄里両村の村落移動と諸御嶽の来歴」疏大史学第3号、1972年。

(11) 伝承者 蔵下真知、鳩間満喜、西本貞治、鳩間正一

(12) 伝承者 西本貞治、西本マアツ

(13) 伝承者 注(1)に同じ。

(14) たとえばナカムトウミ井戸の伝承

(15) 喜舎場永珣「八重山歴史」43頁、175頁。

(16) 喜舎場永珣「八重山民謡誌」157頁。

(17) 伝承者 注(3)に同じ。

(18) 墓碑「石垣市立八重山博物館保管」

照譽月秋居士前石垣親雲上宗延氏長多竜名保久理歳十七与人三拾一首里大屋子三十五頭  
役四十八御座舗五十三隠居康熙三十八年己卯十月十七日卒寿七十一才

(19) 伝承者 鳩間正一

(20) 稲村賢敷「宮古島庶民史」159頁。

(21) 石垣市教育委員会編「八重山の文化財」第二集・1974年刊

(22) 桑江克英「球陽」120頁

(23) 喜舎場永珣「八重山古謡」上巻・157頁

(24) 注(23)に同じ。422頁

(25) 注(10)に同じ。

(伊 波 寛)